一九世紀近世早引節用集における大型化傾向

佐藤貴裕

はじめに

佐藤（二〇〇五）では、従来型節用集の大型化[1]という現象を、刊行書のみに頼るのではなく、その陰に存した諸事象に目配りして記述した。具体的には、刊行寸前で頓挫した例や、刊行をめざした新規企画、大規模な写本の存在を指摘することで、大型化の旺盛さや本格的な大型化への営みの実質を確認したのである。その一方、合冊による安易な大型化や、さらには間紙挿入による見せかけの厚冊化までみられ、過熱気味な様子まで知ることができた。

従来型節用集の大型化は、検索の容易な早引節用集への対抗策として、本文・付録のさらなる充実という手法によりもたらされたものと考えられた。検索法の有用性であらそうのは一八世紀後半で終了しており（佐藤一九九〇）、それを勝ち抜いたのが早引節用集であったから、その点での競いあいの余地はなくなっていた。そこで、早引節用集では徹底して避けられてきた絵入り日用教養付録を充実させるとともに、さらなる本文の増補をもって重厚さを与えたのである。早引節用集を駆逐・超克する「対立」的存在ではなく、「棲み分け」[2]ることで共存を目指したということである。

ただ、この早引節用集との差別化をはかる大型化は、当の早引節用集にも及ぶようになった。本稿は、そのありようを記述しようとするものである。

一　従来型節用集の大型化の様相

まず、従来型節用集の大型化にみられた事象を整理して、検討の要点をつかんでおく。

大型化の骨子である本文の増補と日用教養付録の増補は、まず確認されるべき事項である。日用教養付録を載せないことを是としてきた早引節用集で付録の増補がなされれば大きな変化となる。なお、大型本の定義については、佐藤（二〇〇五）では収載語数三万語を一応の目安としたが、本稿でもこれにならう。

大型化した節用集の種類・再版数も傾向をさぐるのに重要な事項である。『都会節用百家通』[3]に寛政一三・文化八・文政二・天保七年版と幕末の刊行計画（頓挫）があり、『倭節用集悉改嚢』に文政元・九年版の各版と九年版に部分増補版があり、『永代節用無尽蔵』に天保二・嘉永二・文久四年の各版のほかに文政一三年版の存在を指摘するものが知られた。最後発の『江戸大節用海内蔵』は文久三年版しか知られないが、乾巻の最新年記には元治元・二・慶応元・明治三年等が確認され、それらが再版表示に準ずるかと考えられた。

また、刊行にいたらないまでも、大規模な企画の存在も重要である。高井蘭山編の『字貫節用』（文化元年序）や書名不詳の一本、大蔵永常の『早々引』『大々全大早引』（ともに仮称）、同じく永常の書簡にみえる浜松藩家中某編一本の計画などがあった。前稿で触れなかったものでは、松亭金水編『国字註解節用集大全』一二巻（安政五年序、静嘉堂文庫蔵）がある。冒頭の覚書によれば、安政元年から足かけ五年にわたって編集された大規模なもので、書名のとおり、原則として収載語すべてに注記が付される丁寧な作りのものである。当時開版審査にあたっていた学問所の改めも受けており、出資する書肆があれば刊行できる状態であった。松亭金水は、大型化した『江戸』の補訂者でもあるから、同書との関係にも興味が持たれるところである。[4]

本文・付録の充実による大型化傾向が定着すると、大きいこと自体が意味を持ちはじめる。そこで、語数の少ない既存書に大雑書・往来物などを合冊したり、果ては間紙を挿入して嵩を増すなどする見せかけも現れ、大型化の過熱を証するものと認められた。佐藤（二〇〇二・二〇〇五）では次のようなものがあった。

字会節用集永代蔵（安政三年頃。架蔵）　同名節用集に『宝暦大雑書万万載』を合冊

国宝節用集（文化七年。架蔵）　同名節用集（『万徳節用集』の改題）に、書名未詳の往来物と『四体千字文国字引』ほかを合冊。間紙挿入あり

万海節用字福蔵（文化末年頃刊。架蔵）　同名節用集（『四海節用錦繍嚢』の改題）に、書名未詳の往来物と『明光大雑書千稚暦』を合冊。間紙挿入あり

万宝節用富貴蔵（文化三年以降刊。架蔵）　同名節用集に『万万雑書』を合冊。間紙挿入あり

最後のものは近時入手したものである。元の『万宝節用富貴蔵』は、右の『字会節用集永代蔵』『万徳節用集』よりも相応に語数が多いのだが、さらに大雑書を合冊したのである。

二　早引節用集の大型化の概要

まず種類・再版数から見ていく。現在、推計語数三万語をこえる早引節用集には次のようなものがあることが知られる。すべて美濃半切横本である。

書名（内題）	刊年	推計語数	検索法	備考
1いろは節用集大成	文化13（一八一六）序	三・三万	イロハ・仮名数・意義	角書、十三門部分音訓正誤
2大全早字引	天保13（一八四二）	三・三万	イロハ・仮名数・意義	1の改題再版。角書も同じ
3永代節用集	天保14（一八四三）	三・三万	イロハ・仮名数・意義	1の改題再版。角書、早引
4万代節用集	嘉永3（一八五〇）	六・五万	イロハ・仮名数・意義	宮田彦弼編。角書、早引
5永代節用集	嘉永3（一八五〇）	三・三万	イロハ・仮名数・意義	3の再版
6大全早引節用集	嘉永4（一八五一）	四・一万	イロハ・仮名数	角書、増補音訓

7いろは節用集大成	安政5（一八五八）	三・三万	イロハ・仮名数・意義	1の再版
8万世早引増字節用集	文久3（一八六三）	三・四万	イロハ・仮名数	
9大全早引節用集	元治元（一八六四）	四・一万	イロハ・仮名数	6の再版
10万世早引増字節用集	元治頃（一八六四？）	三・四万	イロハ・仮名数	8の再版。雑書入版のみか
11万代節用集	慶応3（一八六七）	六・五万	イロハ・仮名数・意義	4の再版

従来型の大型書は累計で延べ一一～一五版ほどなので、早引節用集でも同様の版数が確認できたことになる。また、異なりでは早引節用集で四書（1468）だが、従来型も『都会』『倭』『永代』『江戸』の四書と同等である。厳密には諸本ごとの出版事情をはじめとする諸状況を考慮する必要があるが、版数・種類からすれば、早引節用集にも同程度の大型化傾向があったと見られる。ただし、諸本によっては大型化のありようは微妙に、また時に大きく異なり、必ずしもひとくくりにはできない。また、『いろは節用集大成』などでは開版時期を吟味する必要もあるので、以下に諸本ごとに問題点を検討していくこととする。

なお、写本や企画については新たに確認できないが、佐藤（二〇〇五）で触れた大蔵永常の『早々引』『大々全大早引』が相当しよう。天保一三・一四年の書簡にみえるので、本屋仲間の解散で版権管理がゆるみだしたのを受けて計画したのでもあろう。

三　大型早引節用集における諸相

いろは節用集大成

従来型節用集の大型化が『都会』（一八〇一年刊）について『倭』（一八一八年刊）に現れたとすると、『いろは節用集大成』（以下『いろは』）の序の年記には注意が必要である。年記どおりに文化一三（一八一六）年かその前後に開版したのなら、機敏な反応とも早すぎるとも思われるからである。この点については二つの考え方がありそうである。

まず、序の年記を信用する立場がありうる。その場合、文化末年ごろに成立しえた理由を考えることになる。本書は『和漢音釈書言字考節用集』（以下『書言字考』）を忠実に早引節用集化したものなので、[5] 機械的な編集作業で事足りたと思われる。また、早くから版権制度が確立されていた京坂の書肆ならば、版権（板株）に敏感なため『書言字考』の版権を顧慮して易々とは刊行できなかったが、尾張では版権意識が薄いために早期に刊行できたと考えることはできる。

一方、序の年記に従わない立場がありうる。『いろは』と思われるものが初めて大坂本屋仲間の記録類にあらわれるのは「出勤帳」三八番で、尾張の出版書「いろは節用集」が早引節用集の重版とされた件である。これが『いろは』をさすなら、文政一〇（一八二七）年か、それをあまりさかのぼらないころの刊行になる。これなら『都会』だけでなく『倭』の文政九年再版より遅くなって、タイミングとしても自然になる。『都会』は大坂書肆の、『倭』は京都書肆を中心とする相合版（共同出版）だが、京坂二都において従来型節用集の大型化が打ち出され、その方向が定着するのが文政ごろと判断されるからであり、この時期なら、早引節用集にも大型化傾向が波及しだしてもよいかと思われるのである。もちろん、『いろは』の開版を文政一〇年ごろとすることで、後続の『大全早字引』『（早引）永代節用集』との時間的なへだたりも小さくなり、不自然に早いようにみえることも解消される。

時期の問題はさておくとすると、本書の特徴は、早引節用集において初めて意義分類を導入したことにある。現代の多重五十音検索なら、各語の位置はピンポイントに決まっていて検索にも迷いがないが、節用集では、イロハや仮名数・意義分類などで収載語を小分けし、その語群を通覧して語を探すことになる。したがって、総語数を増やせば検索時に通覧すべき語群中の語数も増え、結果として検索効率が悪くなる。その点、本書では、イロハ・仮名数のほ

かに意義分類（一三種）を導入して語群を細分しようとしたものと見えるのである。

一方、付録ははなはだ貧弱で「偏冠構字尽・男女名頭相性文字・十干十二支・月之異名・墨移秘伝」が二丁半に納まるだけである。語数の増加とそれにともなう工夫には大型化の展開が認められるのだが、付録類にまでは及んでいなかったのである。

〔早引〕永代節用集

本書は『いろは』をほぼ踏襲するものだが、本文が五〇〇丁半から五〇三丁へと微増されている。が、それよりも注意されるのは付録の増補であろう。ただし、そう大規模なものではない。

まず、巻頭に三色刷りの「大日本国全図」が見開きで示される。従来型節用集でも巻頭には、絵図をはじめ見開き単位で構成された挿絵がくることが多いが、それを意識してのことでもあろう。が、巻頭の付録はこれのみで、残りは巻末に配された。「偏冠構字尽・〔男女五性〕名頭相生字（ママ）づくし」に、「手形証文案書・書翰応答書法大概・御改正服忌令・暦世雑書鑑・大日本国郡田数付・万墨移秘伝」が続いて三五丁分となる。この程度では、辞書本文が大部なので付録が増補されたとも言いづらいが、『いろは』にくらべれば多く、徐々にではあるが、大型化が付録の面に及びつつあると見られる。

〔早引〕万代節用集

右掲の2『大全早字引』・3『〔早引〕永代節用集』は『いろは』の改題改版本であるから、一から編集する必要のない、その意味では容易に現れうる存在である。したがって両書を、早引節用集における大型化を証するものと見ずに、本書『〔早引〕万代節用集』をもって大型化の本格的なおとずれとすることも考えられよう。徹底した増補によって延べ六・五万語という空前の収載語数を達成し、そのために早引節用集として初めて二冊本で開版されるという、画期的な規模と衝撃をともなうからである。

収載語数が多くなると検索効率が問題になるが、『いろは』と同じくイロハ・仮名数・意義分類の三重検索を採用する。ただ、『いろは』よりも二種増えて一五門とするので、細分への配慮のあることが知られる。わずか二種の増加なのでさして評価するに当たらないかもしれないが、編集の実際を想像するとき、意義分類を採りいれただけでも余程の決断があったものと思われる。というのは、『いろは』での意義分類は『書言字考』を仮名数で切り分ければほぼ機械的にえられるものだが、本書の場合は『書言字考』の倍の語数を集成・編集したうえに意義分類をほどこすのだから、『いろは』とは比較にならない煩雑な編集過程があったと推測されるからである。

検索効率の向上に通じるいとなみとして、割行による見出し表示も注目される。多くの見出しが真草二行表示をとるのだが、それを一部放棄して二行並みに見出しを示すのである。姓氏門や地名・人名・官名など固有名詞的なもの、頭字を同じくする熟字、同訓（熟）字、三字以上の熟字などに認められる。紙数の増加をおそれてのことと思われるが、見開き中の語数が増えるので一覧できる語数が増え、丁をめくる回数も減ることにはなる。(6)

なお、付録も相応にあり、巻頭に「大日本国全図・清朝輿地全図」（見開き・三色刷）のほか「弁似」（六丁）があり、本文七八二丁をはさんで、巻末に「偏冠圏字尽・男女五性名頭吉字尽・諸証文手形案書・大日本国知行高一宮諸侯封地」ほか三一丁が八一三丁目までに配される。総丁数の五％に満たないが、『いろは』よりは確実に増えていることが知られる。

〔増補音訓〕大全早引節用集

本書は『大全早引節用集』（寛政八年刊等）をもとに増補したものである。大型の早引節用集としては後発なので何らかの新機軸を打ち出しそうなものだが、これといった特徴はなく、むしろ後退すらしているのがかえって注目される。

語数は増えてもイロハ・仮名数の二重検索のままなので、いかにも検索効率が悪い。先行する二系統四種の諸本がいずれも三重検索を採るのとは対照的である。また、見出しの割行表示もおこなわない。結局、『大全早引節用

集』をそのまま拡張したようなものだが、割行表示については、『倭節用（集）悉改嚢』に権利があるらしく（佐藤一九九七）、それへの配慮として導入しなかったことが考えられる。

原本である『大全早引節用集』では、イロハ・仮名数で細分された語群のなかで、『〔増字百倍〕早引節用集』（宝暦一〇年初版刊）に由来する部分のあとに「増字」の標目を示して『早引残字節用集』（天明五年初版刊）に由来する増補語を続けていた。二重構造が明らかにされているわけだが、本書ではその標目もなく、一見しただけでは増補の痕跡がないもののようにみえる。この方が見やすいかもしれないが、二重・三重の構造であることを明示した方がよいこともあろう。元本文の語と増補本文の語とでは、一般性・頻出性などの差があるのが普通であり、かつ、増補本文まで見なくてよい者・場合もあろうし、増補本文にある特殊な字こそ必要とする者・場合もあろう。一種のランク付けを明示した方が、求める語以外のものを見なくて済むので、結果的に検索効率も高まるのである。また、「増字」の標目があれば語数を増補したことを主張しやすく、販売戦略としても効果的だったのではないだろうか。

このように、本書では趨勢と逆行する点が認められるが、その結果として、早引節用集が否定したはずの意義分類を受けいれず、余計な標目も示していないため、はなはだシンプルで見やすい、その分、接しやすいものにはなっているのである。

万世早引増字節用集

本書も『大全早引節用集』に基づいて増補するが、検索法はイロハ・仮名数引きのままで、見出しの割行表示もない。が、本書には、辞書本文だけで構成された一冊本のほか、付録を大幅に増補した二冊本のあることが注目される。

二冊本は、まず、巻頭の序・目録につづいて「士農工商之図・東都日本橋之景」などの挿絵や「祇園会山鉾之由来・扶桑百将伝」など挿絵入り記事が五四丁付されている。なかには「刻工幸治郎」と署名された図もあり絵画に注力したことが知られる。従来型節用集では挿絵に注力することは普通に行われていたから、その水準に引き上げようとしたのであろう。巻頭付録につづいて五八四丁の辞書本文があり、巻末に「年代記・武家諸役名目抄・男女相生図説并四厄十悪之事・大日本国官用郡名付・〔魚類精進〕当世料理・御改正物忌令・諸証文手形案文」など二五六丁の絵入り記事が付録される。こちらの挿絵は面積も小さく数も少ないが、付録の内容は従来型節用集にもよく見られるものである。こうして増補された付録は総丁数の三〇％を超えるようになるのである。

このように従来型節用集からの影響が質・量ともなって付録に反映されるが、詳しくみれば異なる点もある。たとえば、従来型の節用集なら巻頭付録が大幅に厚く、巻末付録は添え物程度なのだが、本書では逆の配分になるのである。これにはある意図が込められているように思われる。というのは、巻頭付録は別丁付けなのだが、辞書本文と巻末付録とは通しになっていて、最終の丁付けは「八百四十」という大きな数字になっている。この数字によって端的に規模を誇ろうとしたため、巻末付録を厚くしたと考えられるからである。このことは、『永代』嘉永二年刊本の最終丁の丁付けが、本来「三百廿一」とあるべきなのを、別丁付けの巻頭付録分も合算して「口画百十四丁　本文奥合四百卅五丁」と記した意図にも通じるものであろう。大幅に増補したことを数字の上でも端的に示そうというわけである。ちなみに「八百四十」という数字は、六・五万語を擁する『〔早引〕万代節用集』の最終丁付け「八百十三」をしのいでいる。そのあたりが目標値だったのでもあろうか。

四　非大型本による補説

ここでは、語数三万語に満たないが、大型化への志向が認められるものをみていく。

まず、『〔増補再刻〕大全早字引節用集』は、『大全早引節用集』をほぼ踏襲するもので、これといった工夫もないが、少なくとも安政六（一八五九）年版では次のような付録を増補している。

諸証文手形案文（一オ～二八オ）・暦の略解（二八ウ～四〇オ）・書状端作之事ほか書状作法（四〇ウ～四八オ）・目録并箱書付の事（四八オ～四九ウ）・大日本国郡付ほか地誌関係（四九ウ～六〇ウ）・御改正服忌令（六一オ～六五オ）・大日本高名古人寿数（六五オ～六六ウ）・倭音五十字ほか言語関係（六六ウ～七〇オ）・年代略記（七〇ウ～七三ウ）・天神地神之御名ほか年代記・武将伝関係（七三ウ～八〇ウ）

従来型節用集にも見られるものが多いので新味も少ないが、総丁数の二割近くを占めており早引節用集としては異例に多量である。ただし、言語関係の付録が多いのは、節度ある態度と評価すべきだろう。なお、同じ安政六年版でも付録記事のない異本もあるようである。

『早引万宝節用集』（嘉永六年刊）も、『大全早引節用集』を基本に増補して推計語数二・七万語ほどとした、前節の諸本に準ずるものである。ただ、検索法や見出しの表示法は『大全早引節用集』のままであって新味がない。が、本書で注目したいのは「増字」の標目のほかに「再増」の標目を示すことである。「増字」の標目は早引節用集以前にも例があるものだが、再度の増字を「再増」として示すのは本書のみであろう。『〔増補音訓〕大全早引節用集』が三重・四重に増補するにもかかわらず、「増字」の標目すら示さないのとは対照的である。が、むしろ「増字」までとどめるのが普通のようでもあり、「再増」はいささか強調がすぎるようである。もちろん、それだからこそ大型化にさらされた証左といえよう。

内題を「〔増字百倍〕早引節用集」としながら、見返し題を「早引字会節用集」とする嘉永二年刊本がある。本書は『〔増字百倍〕早引節用集』（宝暦一〇年初版刊）とほぼ同内容なので推計語数は一・三万語ほどだが、袋綴の中に間紙を挿入して厚冊化し、さらに見返し題を「永代早引節用輯大全」と改めた異本もある。インターネット上のサイト「とんび岩通信」（http://www.page.sannet.ne.jp/mahekawa）に掲げられた画像しか見たことがないが、電子メールで問い合わせて間紙の存在を確認することができた。早引節用集で初めて真草二行表示を実現したのが『〔増字百倍〕早引節用集』であるが、そのねらいは、携帯に不自由しない範囲での真草二行化であったろう。それを踏襲するはずの本書までが形式的に厚冊化されるのだから、大型化傾向が波及してきたことを示す好例であろう。

『字宝早引節用集』（安政四年刊）は、『〔増補改正〕早引節用集』（宝暦七年初版刊）系の本文をもつので語数は一万語強にとどまるが、判型・レイアウト・構成が注意される。『〔増補改正〕早引節用集』は小本縦本が本来の判型だが、この系統の一九世紀の異本では三切横本が多く、他の系統の早引節用集も美濃半切横本が普通である。これに反して本書は縦本なのだが、辞書本文上欄に付録を配するために、あえてそうしたものらしい。また、『〔増補改正〕早引節用集』系は行書一行表示が多いが、本書は真草二行表示をとる。[7] 別系統の早引節用集にならったことも考えられるが、従来型節用集では寛永年間（一六二四～四三）には真草二行表示が定着するのでそちらにならったとも見られる。さらに本書には日用教養付録を増補した異本がある。辞書本文は一二二丁だが、巻頭に「夢はんじ・安政年代記」など五〇丁を、巻末に「商売往来・年始状」など四八丁を付すのである。こうなると、辞書本文上欄の付録や真草二行表示とあいまって、従来型節用集の本文を早引節用集に差しかえたような構成になる。このような体裁が実現したのは、従来型節用集の大型化が早引節用集に強くおよばされた結果、一種の誤解なりすり代わりなりが生じて、従来型節用集化とでもいうべき流れが形成されたということなのであろう。

おわりに

以上、早引節用集をめぐる大型化傾向について見てきた。

本来、大型化傾向は、従来型節用集が早引節用集と共存できるだけの価値を付加するための営みと考えられた。したがって、早引節用集の側はこれになずむ必要はないはずのものである。しかし、単に収載語を増補するだけにとど

まらず、各種の変容を受けたことが明らかとなった。

まず、『いろは』などで意義分類を導入したのが興味深い。収載語の増大にともなう検索効率の改善なり、依拠本文からの流用なり、やむをえない理由が考えられはする。が、早引節用集は、検索時に不便であるからと意義分類を廃したものだったはずである。また、日用教養付録も同様に一旦は廃したものだが、大幅に増補したものが現れたのであった。この余波は、前節で見たように、語数のさして多くない本にも現れたことをみれば、従来型節用集の大型化傾向はより端的に「早引節用集における従来型への回帰・融合」を招来するまでになったと見られるのである。

このことは一方で、従来型とか早引節用集とかの区分が解消しつつあったことを意味する。おそらく、早引節用集が、より一般的なものになっていったことの現れなのであろう。そのことは、明治以降の節用集が早引節用集一辺倒になるわけだが、そうした勢いに直結するはずのものであろう。

ただし、誤解のないように言えば、「勢い」としては直結するのだが、辞書としての体裁そのものについては別途考える必要がある。たしかに早引節用集は明治以降でも語数の多いものが出はするが、日用教養付録を満載したものは少ない。むしろ、付録類をごく少量に抑えたものが大勢を占めるのである。おそらくは、出版情勢の変化などで、『明治節用大全』（明治二七年刊）のような教養記事を主にするものと、辞書に徹するものとで二分化が起こったということなのであろう。

ならば、一九世紀近世の早引節用集を規程するのにも大型化にばかり目を向けてはならず、むしろ、それらは一部の現象とみておくべきであって、付録に対してストイックな、辞書に徹したものが依然として多かったことを忘れてはならない。また、そうだとすると、大型化した早引節用集でも薄様刷りして厚みを減じたものがあることに注意が向けられる。二冊本で登場した『(早引)万代節用集』にも薄葉刷り一冊本があり、二～三万語ほどの『大全早引節用集』『早引万宝節用集』でも薄様刷りが確認されるが、携帯の便をはかってのことであろう。これに対して、大型化した従来型節用集では原則として薄様刷りは認められない。重厚長大な従来型[8]に対して、軽便な早引節用集という「棲み分け」の構図は、基本的には堅持されていたと見るべきもののようである。

注（1）一七世紀末ごろに発生し、一八世紀には全盛を迎えた節用集を念頭においている。巻頭・辞書本文上欄・巻末に日用教養付録を配し、イロハ・意義分類の二重検索をとり、各々の見出しの楷書と行草書とを併記する（真草二行）。これに対立・批判する存在として早引節用集が発案されたと考えられる（佐藤一九九四）。

（2）諸本の興廃を記述するにあたって、新たに興ったものが在来のものを駆逐・圧倒する「対立の関係」と、性格が異なるあまり共存するようになる「棲み分けの関係」との二つを設定した（佐藤一九九六）。

（3）以下『都会』と略記する。また、『倭節用集悉改嚢』は文政元年版の書名で、同九年版は『倭節用集悉改大全』だが、ともに『倭』と略記する。同じく『永代節用無尽蔵』は天保二年版の書名で、嘉永二・文久四年版は『大日本永代節用無尽蔵』だが、ともに『永代』と記す。『江戸大節用海内蔵』は『江戸』と略記する。

（4）また、青野至誠写『大増宝節用集』（安政三年写本、東北大学附属図書館蔵）も注意すべきか。本書は、『合類節用集』（延宝八年刊）の写本であって、奥書によれば嘉永五年から書写したという。『合類節用集』の収載語は三万に満たないが、八巻一〇冊の威容から大型書と見る余地がないではない。大部の節用集を書写するという営為が刊行を目的とするのかどうか即断できないが、前稿でも『雅俗幼学新書』（安政二年刊）が『倭』や『永代』に近似した内容であったことを考えると、『大増宝節用集』も『雅俗幼学新書』と同じような位置にあるともいえ、一九世紀の大型化傾向の影響下にあったとみられるかもしれない。

（5）佐藤（一九九二）によるが、長い注などは適宜略したり、語順を別途整理するなり、相応の改変も施されている。なお、『書言字考』との関係については山田俊雄（一九九一）の指摘が早い。

（6）割行表示はさほど多用されないので、検索効率をどこまで自覚的に考慮していたかははっきりしないともいえる。

（7）本書が直接に依拠した本文がすでに真草二行表示であったなら、本書独自のものとはしにくい。

（8）例外もある。従来型としてはやや判型の小さい『大成無双節用集』（嘉永二年刊）は枠外余白の大きい半紙判一冊本が普通だが、余白部分を裁って小さくした二冊本があり、携帯向きであったろう。また、従来型節用集ではないが、

規模の大きい『書言字考』に薄葉刷り二冊本・三冊本がある。

参考文献

佐藤貴裕（一九九〇）「近世後期節用集における引様の多様化について」『国語学』一六〇
――（一九九二）「『和漢音釈書言字考節用集』の一展開」『国語学研究』三二
――（一九九四）「早引節用集の位置づけをめぐる諸問題」『岐阜大学国語国文学』二二
――（一九九六）「近世節用集の記述研究への視点」『国語語彙史の研究』一五
――（一九九七）「近世節用集版権問題通覧――享和・文化間――」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』四五―二
――（二〇〇二）「『錦嚢万家節用宝』考――合冊という形式的特徴を中心に――」『国語論究』九
――（二〇〇五）「一九世紀近世節用集における大型化傾向」『国語語彙史の研究』二四
山田忠雄（一九八一）『近代国語辞書の歩み』上下　三省堂
山田俊雄（一九九一）『ことばの履歴』岩波書店

付記　本稿は、科学研究費補助金基盤研究（A）「日本における書物・出版と社会変容」（研究代表者・一橋大学大学院・若尾政希）による研究成果の一部をふくむ。